

SURE: Shizuoka University REpository

<http://ir.lib.shizuoka.ac.jp/>

Title	日韓社会科教育比較考(その1)
Author(s)	馬居, 政幸; 夫, 伯; 尹, 汝晚
Citation	静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇. 26, p. 23-48
Issue Date	1995-03-24
URL	http://doi.org/10.14945/00002892
Version	publisher
Rights	

This document is downloaded at: 2015-07-11T12:57:55Z

日韓社会科教育比較考（その1）

A Comparative Thought of Social Studies in Japan and Korea

馬居 政幸・夫 伯・尹 汝 晩
Masayuki UMAI, Baek POE and Yeoman YUN

（平成6年10月11日受理）

本稿の著者の馬居（静岡大学）と夫伯（韓国慶熙 HOTEL 経営専門大学校）は、これまで日本と韓国の青少年の意識特性とそれを創出する多様な文化の表層と深層における同質性と異質性の構造を明らかにするための比較研究を進めてきた。特に、韓国青少年の日常生活の中に浸透する日本の青少年文化の現状とその問題点について、あるいはソウル大学校師範大学の曹永達との共同による日韓両国の学校と教室文化について、実証的に探究することを通じて、日韓両国の間における新たな相互理解教育のありかたに関する考察を試みてきた。そしてその研究の中間報告として、次の二つの論考を発表した。

- ①「日本と韓国における青少年文化と意識構造の比較研究（その1）—新たな両国の相互理解教育の基礎的作業として—」（静岡学園短期大学研究報告 第5号）
- ②「日本と韓国における学校と教室文化の比較研究（その1）」（静岡大学教育学部研究報告・人文社会科学篇 第44号 曹永達との共著）

さらに、この調査研究の過程において得た資料や知見をもとに、馬居は日本と韓国の社会科教育のあり方の相違に起因すると思われる様々な事象について、各種教育雑誌において論考を発表し、そのハングル訳を夫伯が行ってきた。

また、尹汝晩（韓国ソウル市立清涼高等学校教諭）は平成3年度に教員留学生として静岡大学大学院に派遣されてきたが、馬居と夫伯の研究に理解を示し、馬居の論考の翻訳に携わった。本稿はこのような研究過程を背景に、次の二つの論考とその翻訳を発表するものである。

- ①「『近くて遠い国』で学んだこと」（初出 『PART II』「連続セミナー“授業を創る”」機関誌 No.22 1991年）
- ②「“生活者”にとっての“意味”と“思い”からの再構成を—新たな“人間（あいだ）づくり”のために—」（初出 『現代教育科学 社会科教育』「連載講座・社会がわかるとは何か—脱イデオロギー時代の次に来るもの 9」1991年12月号 No.358 明治図書）

この二つの論考は、いずれも小・中・高等学校の教師を読者対象とする教育雑誌に発表したものである。そのため、読みやすさを優先し、学術論文としての厳密さを欠くことは否定できない。しかし、その分、発表時の社会的背景を直截に反映するものとなっている。また、学校教育の現場をフィールドとする社会科教育の研究にとって、教師のリアリティ構造に接近する

表現様式もまた重要な課題と考える。

その意味で、今後の社会科教育に関する日韓比較研究の基礎的作業の一貫として、本研究紀要の場を借りて、上記二つの論考とそのハングル訳を發表させていただく。これが日韓社会科教育比較研究ではなく日韓社会科教育比較考とした理由である。

加えて、日本語の本文は馬居の単著だが、翻訳作業もまた研究の一貫であることをふまえ、夫伯と尹汝晩の共著とした。

日本文篇

I 「近くて遠い国」で学んだこと

1. 梧井中学の生徒に問われて

「おねえさん方は、昔、日本で大きな地震があったときに、韓国人がたくさん殺されたことを知っていますか。そのことをどう思いますか。」

「今、韓国には、日本からいろんなものがいっぱい入ってきています。今度は経済や文化で韓国を支配しようとするのですか。」

私は今年（1991年）の2月、「韓国の人と歴史と教育の交流旅」と題し、研究室の学生11名（女10、男1）と友人の教師や教育委員会の人達4名と共に、韓国の大田（テジョン）市にある梧井（オジョン）中学校を訪問した。その際、学生と梧井中学2年の代表10名とで懇談会を持った。そこで一人の女子中学生から出されたのが冒頭の二つの質問である。私達を迎えてくれた梧井中学の宋先生の「なにか日本のお姉さん方に聞きたいことがありますか」との問いに、即座に手を上げての質問であった。

「きた！」と思わず私は叫んでしまった。そして参観日に教室の後ろでわが子の発表を待ち望む父親のような気分で、学生が答えるのを待った。

学生はどのように答えたか。その内容は本稿の最後に示したい。理由は『Part II』の読者にも、自分がその場にいるつもりで中学生の質問にどのように答えるかを考えていただきたいからである。

本誌の読者の多くは若い先生方であろう。昭和24年生まれの私より、中学生の前で悩む私の研究室の学生の年代に近い方が多いのではないか。私は朝鮮戦争（6・25動乱）による特需をバネにした日本経済の復興とともに幼児期を生き延びた団魂の世代の尻尾。銃をとった男と銃後を守った女の世代の子どもである。戦争の悲惨さを被害者として身近に知るとともに、加害者としてアジアの人達に対する負い目（責任）の一端を感じる世代の最後と思っている。（ただし、その思いの浅さへのいらだちが、私を韓国の旅に向かわせたことはあとでのべる。）

他方、私と共に訪韓した学生は、学校で教わったかどうかに関わらず、書物やマスコミ等による“情報”として、日本と韓国あるいは朝鮮（韓）半島との関わりの歴史を知ってはいた。だが、自分の身にかかる問題として“悩む”経験はない。戦争は受験やレポートのために記憶し調べる過去の出来事。韓国と日本との関わりも例外ではなかった。

しかし、彼や彼女達も教師になれば、日本に最も近い国が「近くて遠い国」といわれる理由を教えなければならないはず。言葉の意味は教えられても、その意味の重さ、さらに何よりも「近くて遠い国」の人達の“思い”を伝えることは困難であろう。その困難さに学生がいかに気付くか。

最も日本に近い国の中学生が率直に問い掛ける日本と日本人に対する疑問にいかにか“とまどう”か。日本で生活する同年代の人達を教えることを職業として選んだ者が、自分の問題として“悩む”機会をつくること。これが韓国に訪れる度に問われ（問い詰められ）、冷汗を流しながら学んだことへの私自身の“応え”（答えではない）であり、学生と共に韓国を訪れた目的であった。思わず「きた！」と叫んでしまった理由でもある。

2. 私の韓国との出会い

私の韓国への関心は、1986年10月から1988年3月までの間、教員留学生として私の研究室にこられた宋在鴻（Son Jae Hong）先生との出会いにより始まった。先生の現在の職場は梧井中学校。社会科と国史科を担当し、私達を迎えてくれた方である。

この宋先生が留学時に示された非常に真摯な研究態度や極めて積極的な探究心や向上心に接し、私は韓国の教育の伝統と現状に強い興味を覚えた。だが何よりも私にとって衝撃的だったのは、帰国を前にして語った宋先生の次の言葉であった。

「私は日本が嫌いです。だからきました。」

私も日本の研究者の一人として、韓国の人達が日本を嫌っていることもその理由も知っているつもりでいた。だが普段の私への態度から、宋先生は違うと思っていた。ところがそれは私の勝手な思い込みであったわけである。とまどう私の顔を見てか、宋先生は母国を支配した日本で学ぶことについてのアンビバレンツな思いを切々と語ってくれた。だが私には、残念ながら、宋先生が語る言葉の意味は理解できても、その思いを私自身の経験に基づく実感として共有することができなかった。

私は、心の内を明かしてくれた宋先生の信頼に応えるために、また先に述べたように半島の支配にかかわる世代を親に持つ一人の人間として、宋先生の思いの背後にある韓国の人と社会の現実を、自分の五感で確かめなければならないと考えた。そのため宋先生が帰国した年の夏を皮きりに、先生が住む大田を訪ね、小学校、中学校、高等学校、師範大学を何度も訪問し自分の疑問をぶつけていった。

特に、宋先生の通訳で社会科や国史の授業に参加し中学生と語りあった。日本とほとんど変わらない教室と授業の中で、日本の中学生からは感じられない率直さで、次々と私に日本と日本の中学生への疑問と興味を質問してくる彼や彼女達。その言葉や表情に、自分の意見を明確にもち積極的に主張することを鍛える韓国の人の子の育ちの過程を教えられた。また、韓国に刻まれた日本の姿を求めて、百済の都の扶餘を始め古代日本と関わりの深い史跡をたずね、独立記念館や板門店にも行った。しかし、実際に歩いての駕きは、どんな小さな寺院や古墳にも日本の姿を見出すことができることであった。ハングル文字と漢字で記した説明板の中に、日本に文化を伝えたことへの韓国の人達の誇りと、それを自覚しない日本へのいらだちを感じざるをえなかった。

他方、現代韓国の教師の日常を経験するために宋先生のお宅で生活。宋先生の奥さんで行った市場やデパートで韓国の女性のしたたかさを、その姿を撮ろうと不用意にむけたカメラを見て厳しく叱る初老の紳士に東洋の礼儀の国の伝統を学んだ。零下20度近い夜に宋先生と駅の広場にある屋台にいき、安い焼酎を飲み交わして思いを大声でぶつけ合った。このような韓国での生活で学んだことは数えきれないが、特にここでは二つ課題を提示したい。

3. 韓国は先生、日本は生徒

第一の課題は、韓国を知ることなく日本を語ることはできないということである。

高松塚古墳を代表に古代日本が百済や新羅と密接な関係にあったことはよく知られている。最近発掘された伽耶の遺跡により、日本書記に記された任那の日本府が存在しなかったことを、今年（1991年）三月のNHKスペシャルで知った方も多いのではないか。

だがこのような関係は古代のみでない。韓国での旅で痛感したのは、第二次大戦後の日本経済の復興と朝鮮戦争（六・二五動乱）の関係にいたるまで、日本の歴史は朝鮮（韓）半島からの視点を無視しては描けないことである。たとえば次の3人について私達はどれほど知っているだろうか。

李舜臣（イ スン シン） 安重根（アン ジュン クン） 柳寛順（ユ クァン スン）

本誌の読者であればいずれも名前は知っているであろう。特に、李舜臣は、亀甲船で豊臣秀吉の軍隊を破った将軍として、少なくとも中学校の社会科では教えるであろう。ただし、文禄の役が韓国で壬辰倭乱といわれる理由を追求する授業はどうか。李舜臣の銅像が首都を守るように、ソウル駅につながる大通りに立ち、文武両道に優れた名将軍として韓国で最も尊敬されている人であり、亀甲船のモデルがいたるところに飾られて民族精神の象徴になっている意味を問う授業はあるか。豊臣軍が半島をどれほど破壊し人々を殺戮したか。逆に、捕虜として日本に連行された人達が、朱子学や陶器を代表に、どれほど日本文化を創造する役割を担ったかにふれる授業はあるだろうか。まして、多くの捕虜やオランダの奴隷商人に売られた事実を知る日本の教師も歴史学者もほとんどいないのではないか。

4. 韓国の教育と子どもにとって日本は

安重根の場合はどうか。日本では伊藤博文の暗殺者としてふれるに止まる場合が多いのではないか。韓国では全く逆。「侵略の元凶」である「初代韓国統監」の命を奪った「民族の英雄」として、李舜臣とともに尊敬されている人である。

日本でもっとも知られていないのが柳寛順ではないか。彼女は15歳の少女でありながら梨花学堂（現在の梨花女子大の前身）の学生として「3・1独立運動」の先頭にたつた。そして逮捕されたあと拷問をうけてもおお主張をまげず、17歳で獄死。現在、彼女の故郷の天安には広大な敷地をもって独立記念館が建設されている。

この独立記念館には韓国の歴史が9ホールにわけて展示されている。とりわけ李舜臣の功績や近代以後の日本による破壊と犠牲を、見学に来る人達が一目瞭然にできるように、写真や資料とともに実物大の模型や非常にリアルな蠟人形の姿で再現されている。安重根の凜々しい像が展示館の入口にある。

このような李舜臣、安重根、柳寛順の三人の生涯や功績あるいは背景となる歴史は、より詳細に、小・中学校の国語や社会科や国史の教科書に掲載されている。（韓国の社会科は小学校3年から始まり教科書も日本と類似。1、2年は生活科。中学校も社会科は日本と同様だが、2、3年で国史が独立し教科書は国定。なお、韓国の学校制度や教科書や授業の実態については別の機会に紹介したい。）

独立記念館は修学旅行のコースであり、祖父母や親が孫や子どもに自分史を語る場でもある。8月15日の独立記念日には大統領が国民に向かって演説をする場でもある。ただし、日本の旅行会社の行うパック旅行や観光地図には入らない場でもある。

冒頭で紹介した中学生の質問の背景が見えてきたであろう。私は、これらを見出す度に、自分の不明を恥じ、加害者性の自覚の浅さを反省せざるをえなかった。もちろん、歴史的事実の解釈は国によって異なる。だが、この三人はいずれも日本の侵略に対して戦ったのであり、その歴史的事実を私達は否定できない。さらに、韓国の子も達は誰もが学校でまさに人物を通して学ぶわけである。日本の子ども達との間にある溝は深いと言わざるをえない。

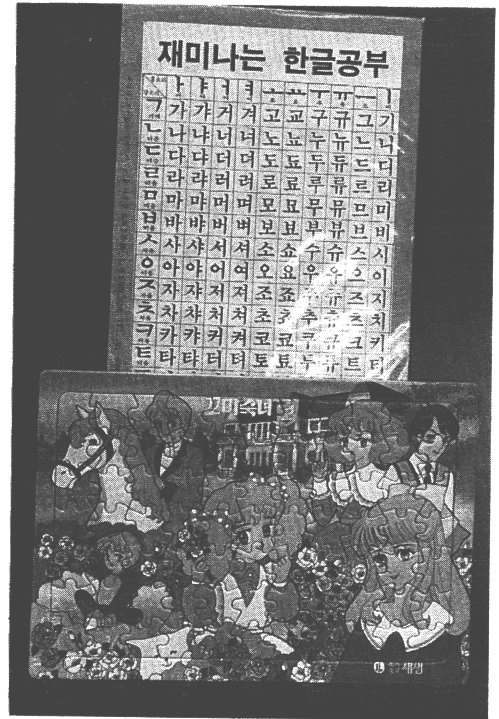
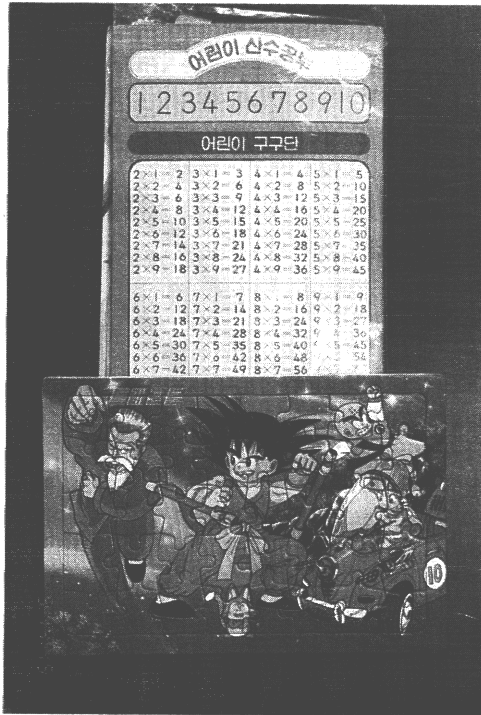
しかし、他方で、独立記念館に2回3回と訪れ、宋先生のクラスの中学生と対話を重ねるうちに疑問が生じてくるのを禁じえなかった。日本ではなく韓国の子も達にとってである。その疑問を明確に意識したのは次の事実に出会ったときであった。

5. 韓国のドラゴンボール



上の写真は、今年（1991年）の正月に慶州からソウルに向かう途中でよった駅の側の小さな本屋で見つけたものである。いずれも日本の漫画のハングル版。韓国でドラゴンボールや北斗の拳が子供達に人気があるとは聞いていたが、これほどとは思わなかった。特にドラゴンボールは日本とリアルタイムに近い。

さらに、次の二枚の写真を見ていただきたい。



表はドラゴンボールにキャンディキャンディ、裏は掛け算とハングルの一覧。日本の五十音と九九にあたる。ともに小学校入学時に子供が遊ぶ(学ぶ)もの。これは大田で最大の文房具店で見つけた。同じ物がソウルのロッテデパートの中にある書店でも売られていた。そこでは日本のテレビアニメシリーズそっくりの絵本が文字のみハングルに変えて並んでいた。冒頭の質問のもう一つの背景である。

私はこれらを書店や文具店で発見して非常に複雑な気分になった。学校では日本がいかに悪いか教えられ、日常生活は日本のもので一杯、というわけである。それも、質問した中学生がどれほど知っていたか不明だが、少なくとも私が取材した限り、ドラゴンボールやキャンディキャンディを日本の漫画と知る親は少ない。宋先生も例外ではなかった。

いったい韓国の子ども達にとって日本とは何なのか。そして日本の子ども達にとって韓国とは。

この疑問を解く鍵は学生の答えの中にあった。

6. 学生の“答え”と私の“応え”

「知っています。よくないことです。二度としてはならないことです・・・。」

「日本の文化や商品が溢れているのは韓国だけではありません。それをどのように考えるかは、韓国の人達の問題です。自分で判断することです！」

これが冒頭の質問への学生の“答え”である。私は最初の答えにホッとしつつも、後者の意見にとまどった。ところが思いがけず宋先生が、「そのとおりです。非常にいい答えです。」と賛同の声をかけてくれ、非は非として認めた上で、互いの問題点を指摘しあえることこそ韓

国と日本が「近くて近い国」になれる道である、と日本語とハングルで話してくれた。私は感動した。そしてこの学生と宋先生の言葉に自分の疑問への“応え”を見出した。

侵略の事実を認め、その誤りと愚かさを後の世代に教え続けること。これが「近くて近い国」になるために日本がなすべき第一歩である。だがそれは批判に“答え”を出したに過ぎない。問題はその上でどう“応え”るか。誤解を恐れずにいえば、政府が謝り教科書が変わろうとも、最も「近い国」で生活する人と人之間にある溝は埋まらないと考える。

教科書の中の日本批判と生活の中の日本文化の狭間で日本の実像に飢える韓国の子供達。最も近い国との関わりを受験のための知識でしか問う意欲のない日本の子供達。この現状が続く限り、互いに「遠い国」であり続けるであろう。では何が必要か。

互いの“いま”に“学びあい教えあう”こと。そのために、利害に引きずられた政治や経済の次元でなく、新たな時代の担い手となる両国の若者や子供達が直接知りあえる機会をどれだけつくるか。これが「近くて近い国」の条件であり、私が韓国で学んだもう一つの、そして最も重要な課題。学生との旅を私自身の“応え”とした理由である。

今年の11月、次の“応え”への歩みを進める予定である。改めて新たな出会いを本誌で報告できることを願って「近い国」への第一報を終わりたい。

Ⅱ “生活者” にとっての “意味” と “思い” からの再構成を — 新たな “人間 (あいだ) づくり” のために —

1. 金浦空港を守る若い兵士

今年 (1991) の二月、私は学生とともに韓国を訪れた。目的は友人の宋在鴻先生が勤める大田 (テジョン) 市の梧井 (オジョン) 中学校と宋先生の母校の公州師範大学との交流。その帰国日の朝、名古屋空港行きの JAL に乗るためにソウルの金浦空港に着いた私達を待っていたのは、自動小銃をもった兵士。学生とほぼ同年齢と思われた。ソウル在住ガイド歴 15 年の蔡 (チェ) さんが「こんなこと始めて」と驚きつつ慎重に先導してくれた。私も訪韓は 5 度目だったが初めての経験。空港へのバスの中で昨晚までの出来事を賑やかに語って (騒いで?) いた学生達も、急に借りてきた猫のようになって兵士の間をぬけて蔡さんの後を追った。

もっとも、兵士が守っていたのは入口のみで空港の中は従来どおり。蔡さんと再会を約束してジャンボ機に乗り込んだ。ところが上空に上がるとともに始まった前夜七時の NHK テレビニュースに、見覚えのあるシーンが映った。(日本の時間と情報の流れに遅れないようとの JAL のサービスなのか、救命用具の案内の後に放映) 軍用機の前で若い女性がパイロットに花束を贈る傍らで子どもを抱いた母親らしい女性が泣いているシーン。昨夜ホテルで見た KBS のニュースと同じ映像だった。ただし、ハングル語は片言の挨拶のみの私は、意味不明のまま見過ごしていた。それが NHK のアナウンサーの声から、湾岸戦争のために韓国軍の輸送機が飛び立つ際に行われた儀式と兵士を見送る家族の別れのシーンであることがわかった。さらにその輸送機が、私達が四日前に金浦空港に向けて名古屋空港 (小牧) を発つ時に、ジャンボ機の窓から見た自衛隊の輸送機と同型であることにも気付いた。

空港の兵士。機内のニュース。ホテルのニュース。小牧基地の輸送機。その関係が見えてくるにしたがい、私の胸に、「ああ、またか!」という思いと 5 年前の苦い経験が蘇ってきた。

2. 日本は私達の犠牲で豊かに

私は 1986 年の正月に静岡県青年の船の講師として、始めて韓国 (釜山) を訪れた。中国の青島市訪問後の寄港のため、僅か一泊二日の滞在であったが、半島とその先に連なる列島という最も近い国に住む “人と人 (あいだ)” がある溝が、いかに深く埋めがたいものかを感じ取ることができた貴重な旅であった。特に、釜山の国連墓地で聞いた次の言葉は私の “社会 (科学) 観” を根底から揺さぶった。

「ここは 6・25 動乱の時に韓国を助けに来てくれて亡くなった恩人の墓地です。あそこに立っている旗の国の人達です・・・日本は来ませんでした・・・日本が高度成長できたのは私達の犠牲があったからです・・・」

通訳の女性の言葉である。私には特別に反日感情をもった方ではなく、50 歳前後の温厚な韓国の女性と思われた。だが、通常の名所旧跡の見学と同様に記念撮影の場を求めて墓地の中を無遠慮にうろつく日本の若者の姿を見て、日頃の思いを語らずにおれなかったのか。その声は静かではあるが厳しく問い掛ける響きであった。しかし私は、最初彼女の言葉の意味を理解できなかった。私自身の朝鮮戦争観と余りにも異なっていたためである。彼女には私の理解する朝鮮戦争という歴史的事実は存在しない、といった方が正確だったかもしれない。

私にとって朝鮮戦争は、社会主義・共産主義に基づく中華人民共和国やソビエト連邦の軍に

支えられた朝鮮民主主義人民共和国と、自由主義・資本主義に基づくアメリカ合衆国を中心とする国連軍に支えられた大韓民国が、北緯 38 度線を境に行った戦争。ドイツの分裂と共に、ソ連と米国という二つの超大国による第二次大戦後の“世界秩序を決定づける戦い”、という位置づけであった。また日本の戦後史の通説では、この戦争に前後して米軍の占領政策が変更。いわゆる“逆コース”と総称される時代に入り、その象徴が世論の反対の中で設置された自衛隊の前進の警察予備隊、とされる。

したがって、この戦争を契機に生まれた自衛隊を憲法違反と位置づけ、反戦平和を主張する論者は多い。だが、韓国の人達を救いに行かなかったという視点から日本の戦後史を問う言葉に私は出会ったことはなかった。

しかし彼女にとってこの戦いは、1950年6月25日に北からの戦車が北緯 38 度線を越えたことにより始まり、300万人の人命と人口の四分の一にあたる 1000万人を越す人達の家族が離散する犠牲を払って、韓国が“国家の存亡をかけて戦った内戦”であった。国連軍として参加した国の人々は、自らの犠牲を省みず助けてくれた恩人。日本は犠牲を払わずに獲得した経済的利益をもとに高度成長への道を進むことによって豊かになった国である。

もっとも彼女の意図は、日本が国連軍に参加すべきであったということではないであろう。日本の再軍備を最も厳しく非難してきたのが韓国の人達である。無頓着に墓地を歩く日本の若者を見て、日本の豊かさが誰を犠牲にして獲得したものかを自覚しないことへの憤りから出たもの、と考える。

ただし、このように彼女の言葉の意味を推し量ることができるようになったのは後のこと。その時は、頭が混乱し返す言葉がなかった。本来ならば、占領下にある敗戦国日本が国連軍に参加できるわけがなかったと反論（いいわけ？）し、日本の平和主義を主張すべきだったかもしれない。だが、砲弾の中を逃げまどった彼女の思いに勝る論理を、今なお私は持つことができない。その意味で、彼女の歴史解釈がどうであれ、彼女の言葉は、私の朝鮮戦争観や半島に住む人達への関心、さらにはその前提の社会（科学）認識のあり方の問題に気付かせてくれた。

3. 通訳の女性の言葉に学んだこと

まず一つは朝鮮戦争の捉え方。社会主義と資本主義という体制間の対立として位置づける視点が、どれほど戦場となった半島の人々の生活世界を無視することであったか。このような認識は、社会主義、資本主義いずれの立場に立とうと、また客観的で精緻な論理構成であればあるほど、朝鮮特需を浮揚力として、東西の冷戦の狭間で高度経済成長を可能にした日本という国家の枠の中の社会で生活する私自身の現状（位置）を正当化する歴史・社会認識としての役割を果たす（これがイデオロギーの意味）、からである。

問題は戦争の原因でも正当性でもない。1950年に半島で生じた戦争の意味を捉える際に、彼女の言葉の背後にある戦火で破壊された人々の生活にとっての意味と、その5年前の戦争による破壊を復興できた列島に住む人々の生活にとっての意味とを比較・関連づけたかどうか。またこのことは、朝鮮戦争や戦後史のみではなく、古代以来の半島と列島に住む人達相互の関係を、“生活者にとっての意味”という視点から捉え直す必要があることを示唆していると考えられる。

その二つは社会認識の方法の限界。社会主義、資本主義のいずれにせよ体制の相違に歴史的社会的現象の認識を還元する方法である限り、戦争は人々の命を奪い生活を破壊する、という生活者の常識を見失うということ。さらにこのことは、客観性、普遍性を重んじる科学的方法

の手順を踏む限り避けえない限界でもあると考える。

科学的・社会的認識の方法を追求する限り、戦争による破壊を数量的に示し、原因や影響を合理的・論理的に説明することはできても、そこで離散した人達の思い自体を表現することはできない。それは非合理で特殊的・個別的なもの。肉親の死の悲しみを、敵を殺す行動にも、生き抜く勇気にも変えられるのが人間。科学の目で見れるのは、一定の社会的状況の元で取りうる様々な選択肢とその条件、あるいは意思決定の確率論的傾向。個々の選択主体固有の悲しみや怒りの深さではない。

通訳の女性の思いの理解は、科学的認識の問題ではなく私自身の他者理解の深さの問題である。科学的・社会的認識はそれを磨くための一つ的手段であっても全てではない。もし全てとして位置づけるならば、そのこと自体が他者の理解を妨げる要因となろう。

そして私にとって「社会がわかる」とは、先の“生活者にとっての意味”と、この“生活者の思い”の理解にかかわるもの。社会の合理的・普遍的理解は研究者の目的であって、生活者には一つの情報にすぎないからである。

だが問題はここから始まる。このように指摘する私自身はあくまで“見る側”であり“意味づける側”にいる。朝鮮戦争や過去の半島と列島の関係に対する“認識主体”ではあるが、その中で“生きる主体”ではない。だが今年の二月の名古屋空港に向かうジャンボ機での経験の意味は異なった。

釜山での通訳の女性の言葉への私の反省は、あくまで私自身の社会の捉え方の問題であった。だがもし金浦空港を守る兵士や子供を抱く母親に、同様に問われたら私はどう答えたか。

日本も派遣（兵）するといえば、かつての侵略に基づく新たな危惧の言葉が、逆に平和主義を主張すれば、再び日本は私達を犠牲にするのか、と非難の言葉が返ってきたかもしれない。何よりも日本ではなくあなたはどうするのか、と問われた場合の答えは。

4. 脱イデオロギーの意味

湾岸戦争は偶発事件ではない。脱イデオロギーの時代故に生じたもの。その中で日本が問われたのは、GNP 個人比世界一、世界の富みの 15%を有する経済大国として世界の再秩序化のために何をするか。東西対立の狭間で米国に依存しつつ自国の貧しさを理由に経済的利益を追う道は断たれた。

脱イデオロギーの時代とは、世界がイデオロギーの呪縛から解放され、理想社会が実現したのではない。単に、既存のイデオロギーでは秩序を維持できなくなったことを意味するにすぎない。かつて D. ベル等により 1960 年代にイデオロギーの終焉と両体制の収斂理論が提起された。共産主義や資本主義というイデオロギーに代わり、科学 (K. ポッパーの反証可能なピースミール・サイエンス) のみが人類の未来を築く、という論理である。だがこのような科学観の誤りは国連墓地での言葉で明らか。科学への信仰もまた一つのイデオロギーとなる。

人間は世界と社会を“ありのまま”ではなく、習慣や信仰あるいは科学や学問などの“概念装置”というレンズを通してしか認識できない。したがってレンズの種類により無限に変化するものが人間の社会的認識の特性である。そのため、①多様性を否定し単一の世界観に統合するか、②多様性を前提に個性的な認識を育成するかが、社会的認識の教育の最重要課題となる。そして、複数の①の立場が世界と社会の支配をめぐり対立するときにイデオロギーが生まれる。イデオロギーとはデマゴークやプロパガンダではなく、「特定集団の利害を正当化するための信念や論

理の体系」だからである。

しかし湾岸戦争をはさむ世界の激変は、①では今後の世界のあるべき方向を描くことができず、②の立場から多様な国や民族や社会や文化が多様なままに“共に生きる道”を創造しなければならないことを示した。その問題を解く舞台に、日本も上がらなければならない。だが日本にとってより困難な問題は、単一民族・言語（の文化・イデオロギー）を前提に同質性を重視してきた自国の中の世界を、異質性を重視に転換することではないか。一人ひとりが“互いの違いを認めつつ共に生きる方法”を日常生活の中に創造しなければならないのである。これが日本とそこに籍を置く者にとっての脱イデオロギーの意味である。

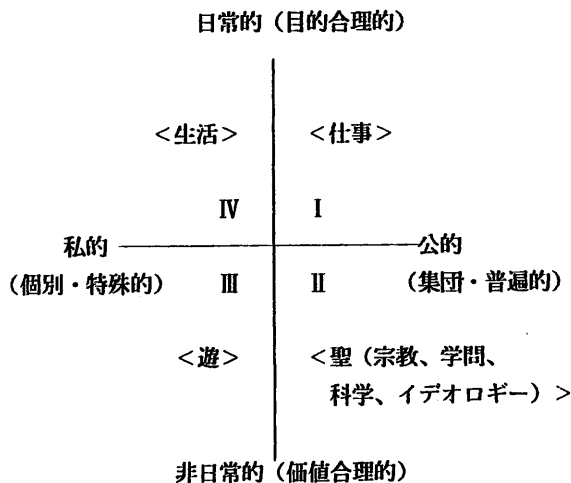
そしてこれこそ社会科教育の真価が問われる舞台であるはず。

理由は社会科こそ戦争への反省に基づき、②の立場から学習者個々の日常に即して生活を創造するために新設された教科であったからである。だが実際には、①の立場からの多様な社会科論が、互いに正当性を主張し対立することはあっても、学校の外や卒業後も含めた学習者自身の多様な生活にとっての意味をどれほど重視してきたか。学習者は、①の知識を教えられる容器か、教師や研究者にとっての理想的孩子も像（これも①）のラベリングの対象として捉えられてこなかったか。

5. “人（あいだ）づくり”を

この図は社会科が対象とする社会的世界の領域を、“日常的—非日常的”“私的—公的”という二つの分析軸で四種に分類したものである。

これまで社会科は、ⅢとⅣの領域を軽視（無視・否定？）し、Ⅰとその正当化のためのⅡの領域の“知識”を教え、その理解（記憶？）度を“社会がわかる”基準としてこなかったか。



公的なⅠとⅡには、文字通り公（おおよけ）に誰もが認める“正解”が必ずある。しかもⅡはその“正義”を証明する。まさに学校で“教える知識”は“正しく善”。理解（記憶？）しない学習者は“誤りで悪”となる。

だがⅠとⅡがどうであれ、Ⅳの生活は存在し続けなければならない。Ⅲの遊びも人類史とともにある。それに対して、ⅠとⅡの歴史は、戦争に敗れて後の40数年。せいぜい遡ってヨーロッ

バ近代か明治の文明開化。脱イデオロギーはⅠとⅡの問題にすぎない。

ただし、私的な生活と遊びの領域であるⅢとⅣの答えは複数で曖昧。相手により異なる場合も多々ある。おまけにその基準は、Ⅲは“楽しさ”、Ⅳは“幸せ”といった“主観的”なもの。またこの領域の特色は“知る”だけでは価値がないこと。具体的で個別的な“生きる場”における様々な“ヒト、モノ、コト”との“間（あいだ）”で“駆使”される過程において、その意味と価値は創られる。教室で教師が強いて勤（勉）めさせても無意味。“知ること”と“できること”の“間（あいだ）”にある溝は、科学的知識の追求のみでは埋められない。

釜山でのとまどいは、通訳の女性のⅣからの問いに私のⅠとⅡが答えられなかったから。ジャンボ機上では、若い兵士と母親のⅣへの答えを私のⅣが見出せなかったことによる。だがⅣである以上、その答えは兵士や母親にもない。私と彼や彼女との“あいだ”に創造するものだからである。

本来一人ひとりの生活を豊かにする手段がⅠとⅡであるはず。だが豊かを追求する過程でⅠとⅡが自己目的化しなかったか。その結果が、湾岸戦争、経済摩擦、外国人労働者、男女共同参画型社会・・・にとまどう現代日本の社会状況ではないか。その責任を社会科もまた免れないと考える。

今必要なのは本来の目的であるⅣ、すなわち“生活者にとっての意味”から公的なⅠとⅡを再構成すること。そのためには、特定の研究者の理論や外国の書物に一元的な正解を求めるのではなく（脱イデオロギーのもう一つの意味）、多種多様な“生活者の思い”の“あいだ”に問いと答えを創造し続けるしかない。そしてその基盤は、どのような人とも“コミュニケーションの網目（ネットワーク）”を張ることのできる主体の育成。すなわち“人の間（あいだ）を創る”ことのできる力（智恵？）の育成こそ、私は“社会がわかる”ための第一歩だと考える。

「가깝고도 먼 나라」에서 배운 일들

馬居政幸 著, 夫伯 譯

1. 梶井(오정)중학의 학생으로부터 질문을 받고

「누님들께서는 옛적에, 일본에 큰 지진이 있었을 때 한국인이 대량 학살을 당한 사실을 알고 계십니까? 이 사실을 어떻게 생각하고 계십니까?」

「지금 한국에는 일본으로부터 여러가지 물건들이 잔뜩 들어오고 있습니다. 이번에는 경제나 문화로써 한국을 지배하려고 드는 것이 가요?」

나는 올해 2월 「한국의 사람과 역사와 교육의 교류 여행」이라는 주제하에 연구실의 학생 11명 (여10, 남1)과 교사인 친구등 교육 위원회 사람들 4명과 함께 한국 대전시에 있는 오정중학교를 방문 하였다. 그때, 학생들과 오정 중학 2학년의 대표 10명과의 간담회를 가졌었다. 그곳에서 한 여중생이 내 놓은것이 머릿말인 두 가지의 질문이었다. 우리들을 맞이 한 오정 중학교의 송선생의 「무엇인가 일본의 누님들에게 물어 보고 싶은 것이 있는가요?」라는 물음에 즉석에서 손을 들어 하는 질문이었다.

「나올 말이 나왔구나!」 하고 나도 모르게 소리쳐 버렸다. 그리고 참관날에 교실뒤에 서서 내 자녀의 발표를 기대하고 있는 아버지의 기분으로 학생이 대답하는 것을 기다렸다.

학생들은 이 물음에 대해서 어떻게 대답을 했을까? 그 내용은 이 기고의 끝부분에 언급하겠다. 자기가 그 자리에 있었다는 가정하에 중학생의 질문에 어떻게 대답할 것인가를 생각해 주시기를 바라기 때문이다. 본지의 독자의 대부분은 젊은 선생님들일 것이다.

1949년생인 나보다 중학생 앞에서 얼떨떨해 하는 나의 연구실 학생들의 언대에 가까운 분들이 많을것 같다. 나는 6.25 사변에 의한 특수(特需)를 용수철과 같이 튀어 오르는 계기로 한 일본 경제의 부흥과 더불어 유아기를 살아 넘긴 세대의 꼬리, 총을 잡던 남자들과 총뿔을 지킨 여자들의 세대의 자녀들이다. 전쟁의 비참함을 피해자로서 몸소 알기도 하고 가해자로서 아시아의 사람들에 대한 부담(책임)의 일부를 느끼는 세대의 마지막 존재라고 생각하고 있다. (단, 스스로 그 생각이 깊지 못한데 대한 초조함이 나로 하여

금 한국으로 여행길을 잡게한데 대해서는 뒤에 서술하겠다. 또한 나와 함께 방한한 학생들은 학교에서 배웠거나 그렇지 않았거나 간에 상관없이 책이나 마스크 등에 의한 “정보”로서 일본과 한국 또는 한반도와 연관되는 역사를 알고는 있었다. 그러나 자신의 몸에 관계되는 문제로서 “고민”으로서의 경험은 없었다. 전쟁은 입시나 레포트를 작성하기 위해 기억하고 조사하는 과거의 일들일뿐, 한국과 일본의 관계도 예외는 아니었다.

그러나 그와 그녀들도 교사가 되면 일본에 가장 가까운 나라가 「가깝고도 먼 나라」라 일컬어지는 이유를 가르치지 않으면 안되는 것이다. 낱말의 의미는 가르칠수 있지만 그 의미의 무게, 더더욱 무엇보다도 「가깝고도 먼 나라」인 사람들의 “마음”을 전달하는 것은 어려울 것이다. 그 어려움을 학생이 어떻게 알아 차릴수 있을까?

가장 일본에 가까운 나라의 중학생이 솔직하게 묻는 일본과 일본인에 대한 의문에 얼마나 당황할까?

일본에서 생활하는 동년대의 사람들을 가르치는 것은 직업으로 택한 사람이 자기의 문제로서 “고민”하는 기회를 만드는 것. 이것이 한국을 방문 할때마다 질문을 받고(땀땀히 답변못해) 식은땀을 흘리면서 배운 것에 대한 나자신의 반응(답은 아님)이며 학생과 같이 한국을 방문한 목적 이었다.나도 모르게 「나왔다」하고 소리친 이유이기도 하다.

2. 나의 한국과의 만남

나의 한국에 대한 관심은 1986년 10월부터 1988년 3월까지의 기간에 교원 유학생으로서 나의 연구실로 오신 송재홍 선생과의 만남으로 부터 시작되었다. 선생의 현재의 직장은 오정 중학교 이며, 그는 사회과목과 국사를 담당하고 우리들을 맞이해 주신 분이였다. 이 宋 선생이 유학시에 나타내신 매우 진지한 연구태도와 극히 적극적인 탐구심이나 향상심에 접하여 나는 한국 교육의 전통과 현상에 강한 흥미를 느끼게 되었다. 그런데 무엇보다도 나로서 충격적 이었던 것은 귀국을 앞두고 한 송 선생의 다음 말 이였다. 「나는 일본이 싫습니다. 그래서 온 것이지요.」

나도 일본의 연구자인 한 사람으로서 한국 사람들이 일본을 싫어하고있는 것을, 그리고 그 이유도 알고 있는 것으로 자인하고 있

었다. 그러나 평소의 나에 대한 태도에서부터 송 선생은 다르다고 생각하고 있었다. 하지만 그것은 내 나뉠대로의 오산 이었던 것이다. 어떨떨한 내 얼굴을 보아서인지 송 선생은 모국을 지배한 일본에서 배우는 것에 대한 앤비 바렌츠 적인 생각을 자세하게 이야기 해주었다. 그러나 나에게서는 유감이지만 송 선생이 말하는 말의 의미는 이해할수는 있지만, 그의 생각을 나 자신의 경험에 비추어 실감으로서 공유할수는 없었다. 나는 마음속을 보여준 송 선생의 신뢰에 응답하기 위하여 또한 먼저 말한 바와 같이 반도의 지배에 관계되는 세대를 부모로 가진 한 사람의 인간으로서, 송 선생의 생각의 배후에 있는 한국사람과 사회의 현실을 자신의 五感으로 확인하지 않으면 안되겠다고 생각했다. 그 때문에 송 선생이 귀국한 후 그해 여름을 기하여 선생이 살고 있는 대전을 방문하여 국민학교, 중학교, 고등학교, 사범학교 등을 몇번이고 방문하여 자신의 의문들을 던져왔다.

특히, 송 선생의 통역으로 사회과나 국사의 수업에 참가하여 중학생들과 서로 이야기를 했다. 일본과 거의 다르지 않은 교실과 수업과정 속에서 일본의 중학교 학생으로부터는 느껴보지 못한 솔직한 태도로 계속 나에게 일본과 일본의 중학생에 관한 의문사항과 흥미를 질문해오는 그들과 그녀들 그 말솜씨와 표정에서 자신의 의견을 명확히 갖고서 적극적으로 주장하는것을 길러주는 한국 사람으로서의 성장과정을 배울수가 있었다.

또, 한국에 새겨진 일본의 모습을 찾아서 백제의 고도인 부여를 시작으로 하여 고대 일본과 관계 깊은 사적을 방문하고 독립 기념관이나 판문점에도 갔었다. 그러나 실제로 걸어 다니며 겪은 놀라운것은 아무리 작은 사원이나 고분에서도 일본의 모습을 발견할수 있었다는 것이었다.

한글 문자와 한자로 표기된 설명 표지 내용에는 일본에 문화를 전달해 주었다는 한국사람들의 긍지와 그것을 자각하지 않는 일본에 대한 안타까움을 느끼지 않을수 없었다.

한편 현대 한국 교사의 일상 생활을 경험하기 위한 송 선생 덕에서의 생활, 송 선생의 부인과 같이 간 시장이나 백화점에서 한국 여성의 빈틈없는, 그리고 그 다부진 모습을 촬영하려고 멋도 모르고 내민 카메라를 보고 엄하게 꾸짖는 초로의 신사에게서 동방 예의 지국임을 새삼 배웠다. 영하 20도에 가까운 밤에 송 선생과 역광장에 있는 포장마차에서 값싼 소주를 서로 나누며 서로의 생각

을 토론했다. 이와 같이 한국에서의 생활에서 배운것은 셀수 없이
 많으나 특히 여기서는 두 가지의 과제를 제시 한다.

3. 한국은 선생, 일본은 학생

첫 번째의 과제는 한국을 알지 못하고 일본을 말할수 없다는 것이
 다. 다카마쓰쓰카 고분을 대표로 고대 일본이 백제와 신라와 밀접
 한 관계에 있었다는 것은 잘 알려져 있는 것이다. 최근 발굴된 가
 야의 유적에 의해 일본 서기에 기록된 임나의 일본부가 존재하지
 않았다는 것을 올해 3월에 NHK스페셜로 알게된 분도 많지 않은가.
 그러나 이러한 관계는 고대 뿐이 아니라 한국에서의 여행에서 통
 감한 것은 제 2차 세계 대전 후의 일본 경제의 부흥과 6.25사변의
 관계에 이르기까지 일본의 역사는 한반도로부터의 시점을 무시하
 고서는 그럴 갈수가 없는 것이다. 예를 들면 다음 3인에 관한 일
 에 대하여 우리들은 어느정도로 알고 있다고 말할수 있을까.

李純臣	(이순신)
安重根	(안중근)
柳寬順	(유관순)

본지의 독자라면 누구나 이름은 알고 있을 것이다.

특히 이순신은 거북선으로 도요도미 히데요시의 군대를 격파한 장
 군으로서 적어도 중학교의 사회과목에서는 가르칠 것이다.

단, 문록의역(文錄の役)이 한국에서 임진왜탄이라고 일컬어지는
 이유를 추구하는 수업은 어떠한가. 이순신의 동상이 수도를 지키듯
 서울역과 연결되는 대로에 세워져 있으며 문무양도에 으뜸한 명장
 군으로서 한국에서 가장 존경되고 있는 사람이며 거북선의 모델이
 도처에 장식되어 민족정신의 상징이 되어 있는 의미를 묻는 수업은
 있는가. 도요도미 군이 반도를 얼마나 파괴하고 사람들을 살육하였
 는가 역으로 포로가 되어 일본으로 연행된 사람들이 주자학이나
 도기의 대표가 되어 얼마나 일본문화를 창조하는 역할을 감당 했던
 가 등에 접하는 수업이 있었던가. 더구나 많은 포로가 네덜란드의
 노예상인에게 팔려간 사실을 아는 일본의 교사도 역사 학자도 거
 의 없는 것이 아닌가.

4. 한국의 교육과 어린이들에게 있어서의 일본은?

안중근의 경우는 어떠한가? 일본에서는 이등박문의 암살자로서 언급되는 정도에 그치는 경우가 많지 않은가. 한국에서는 전혀 다르다. 안중근은 「침략의 원흉」인 「초대 한국 통감」의 생명을 빼앗은 「민족의 영웅」으로서 이순신과 더불어 존경되고 있는 사람이다. 일본에서 가장 알려져 있지 않은것이 유관순이 아닐까? 그녀는 15세의 소녀 이면서도 이화 학당(현재의 이화 여자 대학의 전신)의 학생으로서 「三.一 독립운동」의 선두에 서서 투쟁하였다. 그리고 체포되어 고문을 받으면서도 더욱 주장을 굽히지 않고 17세에 옥사 현재 그녀의 고향인 천안에는 광대한 부지를 차지한 독립기념관이 건설되어 있다. 이 독립 기념관은 한국의 역사가 9개월에 분리되어 전시되고 있다. 그 중에서도 이순신의 공적이나 근대이후의 일본에 의한 파괴와 희생 그것을 견학하기 위해 오는 사람들이 일목요연하게 이해되도록 사진이나 자료가 실물대의 모형이나, 매우 리얼하게 만들어진 납인형의 형상으로 재현되고 있다.

안중근의 씩씩한 상이 전시관의 입구에 있다. 이와 같은 이순신, 안중근, 유관순 3인의 생애라든가 공적 혹은 배경이 되는 역사는 보다 상세하게 국민학교, 중학교의 국어나 사회나 국사의 교과서에 게재되어 있다. (한국의 사회는 국민학교 3학년부턴 시작되며 교과서도 일본과 비슷하다. 1,2학년은 생활과목, 중학교에도 사회과목이 있는 것은 일본과 마찬가지로이지만 2,3학년에서 국사가 독립하여 국정 교과서이다. 그리고 한국의 학교제도나 교과서가 수업의 실태에 대해서는 별도 기획에 소개 한다.) 독립 기념관은 수학여행의 코스이고 조부모나 부모가 손자나 자녀들에게 자신들의 역사를 설명해주는 장소이기도 하다. 8월 15일은 독립 기념일인데 대통령이 국민을 향하여 연설하는 장소이기도 하다. 단, 일본의 여행회사가 하는 코스여행이나 관광지도에는 들어가는 일이 없는 장소이기도 한 것이다. 이제 서두에서 소개된 중학생이 한 질문의 배경이 보이기 시작할 것이다. 나는 이러한 것들을 발견할때 마다 자신의 무지함을 부끄럽게 생각하고, 가해자로서의 자각이 부족함을 반성하지 않을수 없었다. 물론 역사적 사실의 해석은 나라에 따라 다르다. 그러나 이 세 사람은 각자 모두 일본의 침략해 대항에 싸운 것이고 그 역사적 사실을 우리들은 부정할수 없다. 더구나 한국의 어린이들은 누구나 학교에서 이러한 인물을 통해서 일본의 침략에 대해 배우는 것이다. 일본 어린이들과의 사이에 있는 골은 깊다고 밖에

말하지 않을수 없는 것이다. 그러나 한편으로는 독립 기념관에 2-3회 방문하여 송 선생 반의 중학생과 대화를 거듭하고 있는 동안 또다른 의문이 생기는 것은 금할수 없었다. 그것은 일본이 아닌 한국의 어린이들에 관해서 이다. 그 의문을 명확히 인식한 것은 다음 사실과 만났을 때였다.

5. 한국의 드래곤 볼

위의 사진은 금년 정월에 경주에서 서울로 가는 도중에 들른 역 부근 작은 책방에서 발견한 것이다. 어느 것이나 일본 만화의 한글 판이다.

한국에서 「드래곤 볼」이나 「북두의 주먹」이 어린이들에게 인기가 있다고 듣고 있었는데, 이 정도인줄은 몰랐다. 특히 「드래곤 볼」은 일본과 출판 시기를 거의 같이 하고 있었다. 또 다음 2장의 사진(본문 참조)을 보기 바란다. 표면에는 드래곤 볼에 캔디, 그리고 뒷면에는 곱하기와 한글의 일람표. 이것은 일본의 50음과 구구단에 해당 된다. 둘다 국민학교 입학시에 아이들이 가지고 노는(배우는) 것이다. 나는 이것을 대전의 가장 큰 문방구 점에서 발견 했다. 같은 것이 서울의 롯데 백화점안에 있는 서점에서도 판매되고 있었다. 그곳에서는 일본의 TV만화 시리즈 그대로의 그림책이 문자만 한글로 바뀌어져 진열되어 있었다. 서두에서의 질문의 또 하나의 배경이다. 나는 이들을 서점이나 문방구 점에서 발견하며 매우 복잡한 기분에 빠졌다. 학교에서는 일본이 얼마나 나쁜가를 배우고, 일상 생활에서는 일본 것으로 잔뜩 채워져 있는 셈이다. 그것도 질문한 중학생이 어느정도 알고 있었는지 잘 모르겠지만, 적어도 내가 취재한 드래곤 볼이나 캔디를 일본 만화라고 알고 있는 부모는 적다. 송 선생도 예외는 아니었다.

도대체 한국의 아이들에게는 일본이 무엇인가? 그리고 일본의 아이들에 있어서 한국이라는 것은 무엇인가? 이 의문을 푸는 열쇠는 학생의 답변속에 있었다.

6. 학생의 답(答)과 나의 답(答)

「알고 있습니다. 좋지 않은 것이지요. 두번 다시 해서는 안될 것입니다.」 「일본의 문화나 상품이 넘쳐 있는 것은 한국 뿐만이 아닙니다. 그것을 어떻게 생각하는가는 한국사람들의 문제입니다. 자신이 판단해야 할 것입니다.」

이것이 서두의 질문에 대한 학생의 “답변”이다. 나는 최초의 답변에는 다행이라고 생각하면서도 후자의 의견에는 불안했다. 그런데 의외로 송 선생이 「그대로입니다. 매우 좋은 답변입니다.」라고 찬동의 말을 해주며 잘못은 잘못이라고 인정한 위에서 서로의 문제점을 지적 할수 있는 것이야 말로 한국과 일본이 「가깝고도 가까운 나라」가 되는 길이다라고 일본어와 한글로 말해 주었다. 나는 감동했다. 그리고 이 학생과 송 선생의 말에서 나의 의문에 대한 “답”을 발견했다. 침략의 사실을 인정하고 그 잘못과 어리석음을 후세들에게 오래도록 가르쳐 나가는 일. 이것이 「가깝고도 가까운 나라」가 되기 위해 일본이 해야할 첫 단계이다. 그러나 그것은 비판에 대한 답을 낸 것에 지나지 않는다. 문제는 그 위에서 어떻게 대답을 해나갈 것인가이다. 오해를 무릅쓰고 말한다면 정부가 사과하고 교과서가 바뀌더라도 가장 「가까운 나라」에서 생활하는 사람과 사람사이에 있는 골은 메워지지 않을 것으로 생각된다. 교과서 속에 있는 일본 비판과 생활속의 일본문화의 틈에서 일본의 실상에 굶주린 한국의 아이들. 가장 가까운 나라와의 관계를 입시를 위한 지식으로서만 묻는 의욕이 없는 일본의 아이들. 이 현상이 계속되는한 서로는 「먼 나라」로 계속 될것이다. 그러면 무엇이 필요할까? 서로의 “현재”에 “서로 배우고 서로 가르쳐 주는 일”일 것이다. 그러기 위해서는 이해(利害)관계로 끌려다닌 정치나 경제의 차원에서가 아니고, 새로운 시대를 짊어져가는 양국의 젊은이나 아이들이 직접 “이해(理解)할수 있는” 기회를 얼마나 만들 수있는가. 이것이 「가깝고도 가까운 나라」의 조건이며 내가 한국에서 배운 또 하나의, 그리고 가장 중요한 과제이며 동시에 학생과의 여행을 통해서 내가 자신이 찾아낸 “답”인 것이다. 올해 11월, 다음 “답”에의 걸음을 진행시키려는 예정이다. 다시 새로운 만남을 본지에 보고 할수 있을 것을 바라며 「가까운 나라」에의 제 1보고를 마감한다.

“生活人”으로서 意味와 思考로 부터의 再構成을
- 새로운 人間 關係 形成을 위하여 -

馬居政幸 著
夫伯,尹 汝晚 譯

1. 김포 공항을 지키는 젊은 병사.

올해 2월, 나는 학생과 함께 한국을 방문했다. 目的은 知人인 송재홍 선생이 勤務하는 대전시 오정중학교와 송 선생의 모교인 공주 사범대학과의 交流. 귀국하는 날 아침, 나고야 공항행 JAL을 타기 위하여 서울의 김포 공항에 到着한 우리들을 기다리고 있었던 것은 자동 소총을 찬 병사였다.

학생들과 거의 같은 또래로 생각되었다. 15년간 가이드 생활을 한 서울에 살고 있는 체씨는 “이런 일은 처음있는 일이다”라며 놀라면서 조심스럽게 선도를 주었다. 나도 한국 방문이 다섯번째였지만, 처음 겪는 經驗이었다. 공항으로 향하는 버스속에서 어제 밤까지 일어났던 일을 떠들썩하게 말하고 있던 학생들도 찬물을 끼얹은 듯 입을 다문 채 바삐 병사의 사이를 비집고 체씨의 뒤를 따랐다. 하지만 병사가 지키고 있었던 곳은 입구뿐이었고, 공항안은 종전과 같았다. 체씨와의 재회를 約束하고, 점보기에 탑승했다. 그런데, 상공으로 날아 올라 감과 동시에 전날 밤 7시 NHK TV(텔레비전)뉴스에서 본 기억이 있는 장면이 上演됐다. (일본의 시간과 정보의 흐름에 늦지 않도록 하기 위한 JAL의 서비스인지, 구명용구 안내후 방영) 군용기 앞에서 젊은 여성이 조종사에게 꽃다발을 주고 있는 옆에, 어린아이를 안고 있는 어머니로 보이는 여성이 울고있는 장면. 어제 밤 호텔에서 본 KBS의 뉴스와 같은 映像이었다.

단지, 한글로는 인사 정도밖에 할수 없는 나로서는, 의미 불명인채 보고 지나쳤었다. 그것이 GULF전쟁을 위해서 한국군의 수송기가 離陸할 때 행해진 儀式과 병사를 전송하는 가족과의 離別장면이었던 것을 NHK아나운서의 목소리로 알았다. 게다가, 그 수송기가 우리들이 4일 전에 김포공항을 향하여 나고야 공항을 出發할때, 점보기의 창문에서 본 자위대의 수송기와 同型이었다는 것도 알아차렸다. 공항의 병사, 기내의 뉴스, 호텔에서서의 뉴스, 나고야 기지의 수송기. 이 關係를 연관함에 따라, 나의 가슴에는 “아아, 또 인가” 하는 생각과 함께 오 년전에 있었던 씁쓸한 經驗이 되살아 났다.

2. 일본은 우리들의 犠牲으로 豊요하게

나는 昭和 61년 (1986년) 정월에 시즈오카 현 “靑年の 船” 의 강사로서 처음으로 한국(부산)을 방문했다. 中國의 靑島市 방문후의 寄港을위하여 겨우 일박 이일의 滞在였지만 반도와 그 앞에 이어진 열도라고 하는 가장 가까운 나라에 사는 “사람과 사람 사이” 에 있는 곶이 얼마나 메우기 힘든 것인가를 느낄수 있었던 귀중한 旅行이었다. 특히, 부산의 UN 묘지에 서 들은 다음날의 말은 나의 사회 (과학)관을 뿌리채 흔들어 놓았다.

“여기는 6.25 동란때, 한국을 도와 주려고 왔다가 사망한 은인의 묘지입니다. 저곳에 서있는 국기들 나라의 사람들입니다. 일본은 오지 않았었습니다. 일본이 고도 成長을 할 수 있었던 것은 우리들의 희생이 있었기 때문입니다.” 통역했던 여성의 말이였다. 나에게는 특별히 반일 감정을 가진 분이 아닌 50세 전후의 은후한 한국의 여성으로 생각되었다. 그러나, 통상 명소 유적의 전학과 같은 모양으로 기념 촬영장을 찾아 묘지사이를 서슴치 않고 서성거리는 일본의 젊은이의 모습을 보고 그 때 생각을 말하지 않고는 건딜 수 없었던 것인가? 그 목소리는 조용했지만 엄하고 문책하는 듯한 울림이었다. 그러나, 나는 처음에는 그녀의 말의 의미를 理解할 수 없었다. 나 자신의 한국 전쟁관과는 너무도 달랐기 때문이었다. 내가 理解하고 있는 한국전쟁이라는 歷史的 사실은 그녀에게는 존재하지 않았다 라고 말하는 편이 정확한지도 모르겠다.

나에게 있어서 한국전쟁은, 社會主義, 共產主義에 근거한 중화인민 공화국, 소련군에게 支持받았던 朝鮮民主主義人民共和國과, 自由主義, 資本主義에 근거한 美國을 중심으로 하는 聯合軍에게 支持받았던 大韓民國이 북위 38도선을 경계로 한 戰爭. 독일의 분열과 함께, 소련과 미국이라고 하는 두개의 초강대국에 의해 제2차 대전후의 “세계 질서를 결정지은 싸움”이라는 자리매김 이었다.

또한 日本戰後史의 통설로는, 이전쟁을 전후로 하여 美軍의 일본 占領정책이 변경되었다. 소위 “역코스”로 총칭되는 시대에 돌입하여 그 상징이 여론의 반대속에서 설치된 自衛隊의 전신인 警察豫備隊로 되어진다.

따라서 이 전쟁을 계기로 태어난 自衛隊를 憲法違反으로 자리매겨, 反戰平和를 주장하는 논자가 많다. 그렇지만, 한국사람들을 구하러 가지않았다고 하는 時點에서 日本의 戰後史를 묻는 말을 나는 만난 적이 없었다.

그러나 그녀에게 있어 이 싸움은, 1950년 6월 25일, 北으로부터의 戰車가 38도선을 넘은 것으로부터 시작되어, 300만명의 人命과 人口의 4분의 1에 해당하는 1000만을 넘는 사람들의 가족이 이산하는 희생을 치르고, 韓國이 “국가의 존망을 걸고 싸운 內戰”이었다. UN軍으로서, 참가한 나라의 사람들은, 자기의 희생을 돌보지 않고 도와 준 恩人. 일본은 희생을 치르지 않고 획득한 경제적 이익을 기반으로 高度成長으로의 길을 달림으로 해서 풍요하게 된 나라이다.

더우기 그녀의 의도는, 日本이 UN軍에 참가해야만 했다고 하는 것은 아닐것이다. 日本의 再軍備를 가장 격렬하게 非難해 온 것이 한 국사람들이다. 무심하게 墓地를 걷는 일본의 젊은이들을 보고, 日本의 풍요가 누구를 희생으로 하여 획득한 것인가를 자각하지 못하는 것에 대한 분노로부터 나온 것이라고 생각한다.

단지 이와같이 그녀의 말의 의미를 헤아릴 수 있게 된 것은 그 후의 일. 그때는 머리가 혼란스러워 대답할 말이 없었다. 원래라면 占領下에 있는 敗戰日本이 UN軍에 참가할 수 있을 이유가 없었다고 反論(辨明?), 일본의 平和主義를 주장해야만 했었는지도 모르겠다.

그러나 포탄속을 피해서 헤맸던 그녀의 생각을 이길 논리를 지금도 나는 가질수가 없다. 그 의미에서, 그녀의 歷史解釋이 어떻든, 그녀의 말은 나의 韓國戰爭觀이나 半島에 살고 있는 사람들에게 대한 관심, 게다가 그 前提의 社會(科學)認識의 상태의 문제를 깨닫게 해주었다.

3. 통역한 여성의 말에서 배운 것

우선 하나는 韓國戰爭의 把握方式. 社會主義와 資本主義라고하는 體制間的 對立으로서 자리매긴 時點이, 얼마나 전쟁터가 되었던 半島의 사람들의 생활세계를 無視한 것 이었는가. 이와같은 認識은 社會主義, 資本主義 어느 입장에 선다해도, 또 客觀的이고 精密한 論理構成이면 일수록, 韓國戰爭特需를 浮揚力으로 東西冷戰의 사이에서 高度經濟成長을 가능하게 한 日本이라고 하는 국가의 틀속의 사회에서 생활하는 나 自身の 現狀(位置)을 정당화하는 歷史, 社會認識으로서의 역할을 다하기(이것이 이데올로기의 의미)때문이다.

문제는 전쟁의 원인도 정당성도 아니다. 1950년 한반도에서 일어난 전쟁의 의미를 파악할 때에, 그녀 말의 배후에 있는 戰火로 파괴된 사람들의 생활로서의 의미와, 그 5년전 전쟁에 의한 파괴로부터 부흥할 수 있었던 일본열도에 사는 사람들의 생활로서의 의미를 比較, 關連짓는다면 어떨까.

또 이것은 韓國戰爭이나 戰後史뿐만 아니라, 古代이래 반도와 열도에 사는 사람들의 相互關係를 “生活人으로서의 意味” 라는 시점으로 부터 把握轉換할 필요가 있음을 시사하고 있다고 생각한다.

또 다른 하나는 社會認識方法의 限界.

社會主義, 資本主義 어느 것이던 體制의 相違에 歷史的 社會事象의 인식을 挽回하는 方法으로서의 전쟁은 사람의 목숨을 빼앗고 생활을 파괴한다고 하는 생활인의 상식을 看過하는 것. 게다가 이것은 客觀性, 普遍性을 중시하는 科學的 方法의 수순을 밟는 한에 있어서, 피할 수 없는 限界라고 생각한다.

科學的 社會認識의 方法을 추구하는 한, 전쟁에 의한 파괴를 수량적 으로서만 나타내 그것의 원인이나 영향을 합리적, 논리적으로 설명이 가능해도, 거기에서 離散한 사람들의 思想 자체를 표현할 수는 없다. 그것은 비합리적이고, 특수적, 개별적인 것. 친부모의 죽음에 대한 슬픔을, 敵을 죽이는 행동에도 살아나가는 용기로도 변할 수 없는 것이 人間. 科學의 눈으로 볼 수 있는것은, 일정한 사회적 상황 하에서 취할 수 있는 다양한 選擇項目과 그 條件, 혹은 意思決定의 確率論的 傾向이지 개개의 選擇主體 고유의 슬픔이나 분노의 깊이는 아니다.

통역한 여성的 思考理解는 科學的 인식의 問題가 아닌 나 自身의 他者理解의 깊이의 問題이다. 과학적 社會인식은 그것을 연마하기위한 하나의 수단일지언정 전부는 아니다. 만약 전부로서 자리매김한다면, 그것 자체가 他者의 이해를 방해하는 요인이 될 것이다.

그리고 나로서는 “사회를 안다” 고 하는 것은, 앞의 “생활인으로서 의 의미” 와 이“생활인의 思考” 의 이해가 관련되어있다. 사회의 합리적, 보편적 이해는 연구자의 목적이고, 생활인에게는 하나의 정보에 지나지 않기 때문이다.

그러나 問題는 여기서부터 시작된다. 이처럼 지적한 나 自身은 어디 까지나 “보는 측” 이면서 “意味를 부여하는 측” 에 있다. 한국전쟁 이나 과거의 반도와 열도의 관계에 대한 “認識主體” 이지만, 그 속에서 “살고있는 主體” 는 아니다. 그러나 금년 2월 나고야 공항을 향한 정보기에서의 경험의 의미는 달랐다.

부산에서 통역한 여성的 말에 대한 나의 반성은, 어디까지나 나 自身의 社會把握方式의 問題였다. 그렇지만 만약 김포공항을 지키는 병사나 아이를 안은 어머니가 같은 질문을 한다면 나는 어떻게 대답했을까.

일본도 派遣(派兵)한다고 말한다면 이전의 侵略에 근거한 또다른 憂慮의 말이지만, 역으로 平和主義를 주장한다면 또다시 일본은 우리를 희생으로 삼는가 하는 비난의 말이 돌아올지도 모르겠다. 무엇보다도 일본이 아닌 당신은 어떻게 할 것인가. 이 경우 대답은?

4. 脫 이데올로기의 意味

걸프전쟁은 우발적 사건이 아니다. 脫이데올로기 時代때문에 생긴것 그 가운데서 일본에게 물은것은 개인 GNP 세계1위, 世界 富의 15%를 가진 經濟大國으로서 世界의 再秩序化를 위해 무엇을 할 것인가. 東西對立의 사이에서 미국에 의존하며 自國의 貧困을 이유로 經濟的 利益을 추구하던 길은 막혔다.

脫이데올로기의 時代라고 하는 것은, 세계가 이데올로기의 束縛으로부터 解放되어, 理想社會가 실현된 것은 아니다. 단지, 기존의 이데올로기로는 秩序를 維持할 수 없게된 것을 의미하는 것에 지나지 않는다. 이미 다니엘 벨등에 의해 1960년대에 이데올로기의 종언과 兩體制의 收斂理論이 제기되었다.

共產主義나 資本主義라고 하는 이데올로기 대신, 科學(칼 포퍼의 反證가능한 piecemeal science)만이 人類의 미래를 구축한다는 이론이다. 그러나 이러한 과학관의 오류는 UN墓地에서의 말로 분명한 바, 과학에 대한 신앙 또한 하나의 이데올로기가 된다.

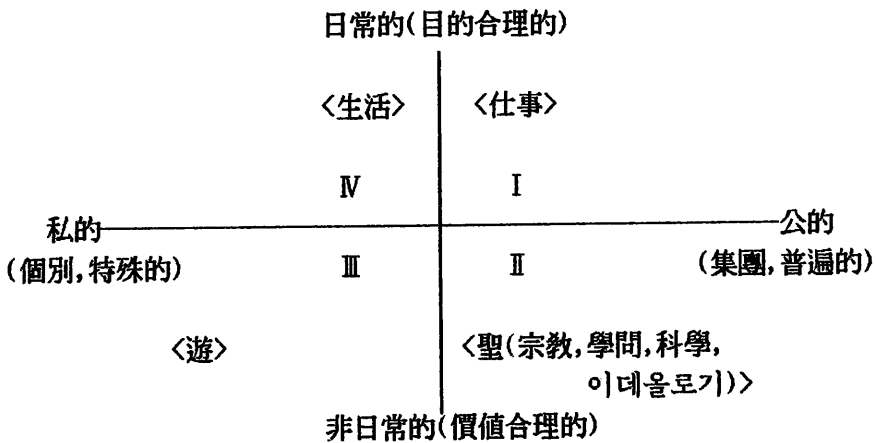
인간은 세계와 사회를 “있는 그대로” 가 아닌 습관이나 신앙 또는 과학이나 학문등의 “概念裝置” 라고 하는 렌즈를 통하지 않고서는 認識할 수 없다.

따라서 렌즈의 종류에 의해 무한히 변화하는 것이 인간의 社會認識의 특성이다. 그렇기 때문에 (1) 多樣性を 부정하여 單一의 世界觀으로 통합할 것인가, (2) 多樣性を 전제로 個性的인 認識을 육성할 것인가가, 사회인식의 교육의 가장 중요한 과제가 된다. 그리고 복수의 (1) 의 입장이 세계와 사회의 지배를 둘러싸고 대립할때 이데올로기가 태어난다. 이데올로기라고 하는 것은 데마고그나 프로파간다(선동, 선전)가 아니라 ‘특정집단의 利害를 정당화하기 위한 신념이나 논리의 체계’ 이기 때문이다.

그러나 걸프전쟁을 사이에 둔 세계의 격변은 (1) 로는 今後 있어야 할 세계의 방향을 그려낼 수가 없고, (2) 의 입장에서 다양한 국가, 민족, 사회, 문화가 다양한 그대로 “함께 사는 길” 을 창조하지 않으면 안된다는 것을 보여 주었다. 그 문제를 푸는 무대에, 일본도 등장하지 않으면 안된다.

그러나 일본으로서 보다 곤란한 문제는, 單一民族, 言語(의 文化, 이데올로기)를 전제로 동질성을 중시해 온 自國內의 세계를, 異質性 중시로 전환할수는 없을까. 한사람 한사람이 “서로의 차이를 인정하면서 함께 사는 방법”을 일상생활 속에서 창조하지 않으면 안된다. 이것이 일본과 거기에 籍을 둔 자로서의 脫이데올로기의 의미이다. 그리고 이것이야말로 社會科教育의 眞價가 요구되는 무대일 것이다. 이유는 社會科야말로 전쟁에대한 반성에 의거하여, (2)의 입장에서 학습자 개개의 일상생활을 창조하기 위해 신설된 教科였기 때문이다. 그러나 실제로는 (1)의 입장에서 다양한 社會科論이 서로 정당성을 주장해 대립하는 일은 있어도, 학교밖이나 졸업후를 포함한 학습자 자신의 다양한 생활로서의 의미를 어느정도 중시해 왔는가. 학습자는 (1)의 지식을 가르칠수 있는 容器인가, 교사나 연구자로서의 이상적인 兒童像 (이것도 (1)의 레벨화의 대상으로 포착되어 오지 않았는가?

5. “人間關係 形成”을



이 그림은 사회과가 대상으로 하는 사회적 세계의 영역을 “일상적-비일상적”, “사적-공적” 이라고 하는 두개의 분석軸으로 4종류의 분석을 한 것이다. 지금까지 사회과는 Ⅲ과 Ⅳ의 영역을 경시(무시, 부정?)하여 Ⅰ과 그 정당성을 위한 Ⅱ의 영역의 “知識”을 가르쳐, 그 이해(기억?)도를 “사회를 아는” 기준으로 해오지 않았는가.

공적인 I과II에는 글자 그대로 공적으로 누구도 인정하는 “正解”가 반드시 있다. 게다가 II는 그 “正解”를 증명한다. 확실히 학교에서 “가르치는 지식”은 “정당하고 善”, 이해(기억?)하지 않는 학습자는 “잘못이고 惡”이 된다.

그러나 I과II가 어떻게, IV의 생활은 존재를 계속하지 않으면 안된다.

III의 놀이도 인류사와 함께 있다. 그것에 대해 I과II의 역사는 전쟁에 패한후 40여년. 기껏 소급해도 유럽 근대 또는 明治의 문명개화. 脫이데올로기는 I과II의 문제에 지나지 않는다.

단지 사적인 생활과 놀이의 영역인 III과IV의 대답은 복수여서 애매하다. 상대에 따라 다른 경우도 다수있다. 게다가 그 기준은 III은 “즐거움”, IV는 “행복함”이라고 하는 “主觀的”인것. 또 이 영역의 특색은 “안다”는 것 만으로는 가치가 없다. 구체적이고 개별적인 “삶의 터”에 있어서 다양한 “사람, 물건, 일”과의 “관계”로 “驅使”되는 그 과정에 있어서 그 의미와 가치가 만들어 진다. 교실에서 교사가 무리하게 시켜도 무의미하다.

“아는 것”과 “할수 있는 것”의 “관계(사이)”에 있는 골은, 科學的 知識의 追求만으로는 메워 질수 없다. 부산에서의 당혹함은 통역한 여성의 IV로부터의 질문에 나의 I과II가 대답할수 없었기 때 문이다. 점보기 안에서는, 젊은 병사와 어머니의 IV로의 대답을 나의 IV가 찾아내지 못한 것에 의한다. 그러나 IV인 이상 그 대답은 병사나 어머니에도 없다. 나와 그나 그녀와의 “관계(사이)”에서 창조할 것이기 때문이다.

본래, 한사람 한사람의 생활을 풍요롭게 하는 수단은 I과II일 수 밖에 없다. 그러나 풍요를 추구하는 과정에서 I과II가 自己目的化 하지 않았는가? 그 결과가 걸프전쟁, 경제마찰, 외국인노동자, 남녀 공동 참여형 사회...에 당황하는 현대 일본의 사회 상황이 아닌가? 그 책임을 사회과도 또한 면할 수 없다고 생각한다.

지금 필요한 것은 본래의 목적인 IV, 즉 “생활인으로서의 의미”로부터 공적인 I과II를 재구성하는 일. 그러기 위해서는, 특정의 연구자의 이론이나 외국 서적에 一元적인 해답을 구하는 것이 아니고(脫이데올로기의 또 하나의 의미) 다양한 “생활인의 사고”의 “관계”에 질문과 답을 계속 창조하는 수 밖에 없다. 그리고 그 기반은 어떠한 인간과 “The Network of Communication”을 펼칠 수 있는 主體的 育成. 즉, 인간과의 관계를 창조하는 것이 가능한 힘(지혜?)의 육성이야말로 나는 “사회를 알기” 위한 第一歩라고 생각한다.